

(研究ノート)

宗内敦先生の教育論

保坂三雄

(山梨県教育委員会)

宗内先生の最初の著作である『発達臨床心理学』は、1978年に初版発行されている。この頃は、不登校が増え、非行問題が社会問題になりつつあった時期でもある。宗内先生は、家庭裁判所の調査官としての11年間の非行臨床体験をベースにして、教育の現場に、心理臨床的な知見を導入し、児童・生徒の「問題行動」に対処しようと考えられたものと思われる。

それに続く1980年代は、校内暴力など学校が著しく荒れた時代であった。現場の先生方は、「問題行動」が身近に頻発し、その対応に苦慮する状況になってしまった。

そうしたときに、『発達臨床心理学』は、児童・生徒についてその発達段階から心理臨床的に考察し、「問題」を深く検討し、学校はどのように対応すべきかを示す先駆けとなる適切な指導書となった。

その後、校内暴力は、体育会系の教師を中心に「毅然とした」対応により、影をひそめるようになった。学校は規律を取り戻したのである。しかし、それですべてがうまくいったのではなく、今度は不登校やいじめの増加がクローズアップされ、社会問題となった。

宗内先生は、「うわべだけの力に頼る『毅然たる指導力』、というものは一歩間違えるとただの権力的、権圧的な指導にすぎなくなり、子ども達を抑圧し、また反抗的にして、様々な問題行動を引き起こす大きな要因ともなることを示している。」と警鐘を鳴らした。

では、現場の教師は、この問題にどのように対処していけばよいのか。宗内先生は、『指導力の豊かな先生』(1988)、『先生出番です!』(2007)を出版する中で解答を示した。

宗内先生は、「教師の指導力というものは、教師がいかなる権威を持ち、そして児童・生徒とどのような関係を結ぶかによって決まるものです」と言う。教師は、児童・生徒に好かれ、尊敬と信頼を得て、そのことが指導力として結実すると言い、そのために次の4本柱を提唱した。

- ① 「専門的権威」：豊かな学識を持ち、それを分かり易く教える技術を持っている。
- ② 「人格性権威」：優しく親切、公平で正義の人であるなど、人格・人間性が優れている。
- ③ 「関係性権威」：個々を理解し、ふれあい、指導を受け入れられる関係を作ることができる。

これらが必要であるが、しかしこれだけでは不十分で、「まだ未熟な『子ども』をある種の規範や基準に従って教育・指導しなければならないという性質上、必然的に「強制性」「審判性」・・・といった関係構造が存在する」と言う。即ち、

- ④ 「統制的権威」：不適切な行動を統制し、指導に従わせる力がある。

児童・生徒は、「教師が管理的・統制的に振舞うことを正当な権限として認めている」という調査結果も加え、「統制的権威」について説明している。

教育・指導関係は、親子関係や、カウンセリングなどの人間関係と違う「専門的關係」であることを強調している。単なる熱血教師は危ういし、優しいだけの教師もころもたない。愛情と、尊敬を得る中で、いざとなった時に体を張ってでも叱って諫めることができるか、ということであろうか。「強制性・審判性・統制性といった、子どもにフラストレーションをもたらす関係構造をそのまま有益な教育的関係に転ずることを可能にする」という視点・主張は、他の研究者の成書ではなかなかお目にかかれぬ宗内先生の独自性と感している。

なお、「体罰」という極端な統制行動については、「教育・指導力とはまったく無縁な暴力行為」として勿論のこと完全否定をしている。

宗内先生の教育論は、親子関係、子育て、非行やいじめなどの広範なテーマにおいて論述されている。発表の場も、学術書はもとより、新聞（朝日新聞の論壇等）、月刊誌（『児童心理』『教育心理』等）、文芸同人誌（『琅』）等と多岐に亘っている。一般の読者をも念頭に置いてか、文章が分かり易い。適切な挿話や事例が豊富であることも特徴である。

親子関係、人間関係、非行やいじめなどのやや特別な人間関係等、「関係」を理解することは非常に難しい。個々別々の個性を持つ人間同士が、いろいろな要因が渦巻く複雑極まりない社会状況の中で、「関係」が生じているとしたら、その関係を読み解くことは非常に難しいということとは至極当然であろう。学問を基にして理解することは有用だが、それだけで事足りるとも言い難い。

私の好きな宗内先生の著作に「母と子—優しさと厳しさと—」『二言、三言、世迷い事』（2011）は、親子関係、子育てを語るときに、欠かせない重要な「関係の在り方」を示している。この関係がどうあったらよいか学問的に教示しようとしたとき、抽象的に説明することでは恐らくなかなか理解がし難い面があろう。宗内先生は、この短編の中で、この難しいテーマについてとても簡単に分かり易く、感動的に、その本質を示している。

バスの中、疲れて眠っていた少女は、母の強い意志の元、初老の老人に、席を譲ることになる。固辞する老人と渋る少女。母は、多少の強引さをもって少女を立てた後、少し離れた場所で、「少女を抱き、謝るように、論ずるように」髪を撫でてやるのである。この光景こそ、「やさしさと厳しさ」の在り方を端的に物語っている。母、少女、老人のそれぞれの心の動きを言葉としても表現しているので、小説を読むかのように分かり易く、感動的である。実は、この老人こそ宗内先生その人であった。

難しい事象を、その真髄を示す最適な場面・光景、事例をもって解説する手法を「読み物風専門書」と、宗内先生は称している。宗内先生は、評論、エッセイも手掛け、俳句もたしなむ方。世相を切る評論は痛快であり、大相撲をはじめとするスポーツ評論もその鋭さにはうならせるものがある。宗内先生は、真偽のほどははっきりしないが、かつての武蔵丸と偶然顔を合わせる機会を得た時、宗内先生の進言が功を奏してか武蔵丸は自らの取り口を変え優勝につながったとする伝説の持ち主である。学者、教育者、評論家、エッセイストとしての論理性と、俳人という豊かな感性が一体となって初めて、難しいことを、その本質部分を抽出して、分かり易く翻訳して「読み物風」に表現してくれるのではないかと感している。

さらに付け加えるなら、宗内先生の出自、育ちも、その教育論に大きな影響を与えていると思われる。毛利家ゆかりの家柄でいて寒村に落ち延びた一族という。明治維新により、再興の好機を迎えたものの、敗戦により頓挫。束の間とはいえ貧困生活も経験している。宗内先生の著作を見れば、青春時代は、恋も、やんちゃも怠惰も挫折も赤裸々に記載されている。優等生一直線の人生を過ごしてきたわけでは決してない。大学教授になってからも、持ち前の正義感から上司による不正受験要請を断固拒否するなどにより、上司からの嫌がらせを受けたり、職場同僚たちからのいじめも受け、理不尽な差別に苦しむ辛い時期もあったという。つまり、生活面では上流も下流も経験し、人間関係では被害者の立場も経験している。紆余曲折、多種多様な人間模様を糧にして宗内文学、教育学が成立しているものと思われる。

前出「母と子—優しさと厳しさと—」には後段がある。件の親子と宗内先生を乗せたバスが、終点に近づいたとき、宗内先生はある行動に出た。少女と母のもとに急ぎ近づき、「ありがとう」と感謝の意を伝えた。「さして嬉しそうにもなく、少女は眠気半分の顔で頷いた。私はさらに、今度は少女へともなく、その母へともなく言った。“こんな優しいお母さんに育てられて、きっと、優しい立派な人になりますね。頑張ってるね、少女の顔がさっと輝き・・・」先頭を切ってバスを降りる宗内先生の背中に、「明るい少女の声が飛んできた“さようなら、振り返ると、母親に凭れて少女が小さく手を振っていた。つれて母親も手を振ってくる・・・」。微笑ましく、美しく、暗れやかなシーンで、感動を覚えざるを得ない。

この小論の前段においては、「優しさと厳しさと」のテーマを正に絵に描いたような母子を紹介している。難しい教育学を勉強するより、子育ての在り方を雄弁に教えられる。宗内先生ならではの語り口が生き生きと状況を描写する。このテーマについては、このエピソードの紹介だけで十分目的を達成していると思われる。

しかし、同時に宗内先生の教育論を語る時、後段で見られた宗内先生自身の行動にも注目したい。母に急かされ眠いののに席を譲った少女の気持ちに思いを馳せる。少女にすれば、愛する母からの指示とはいえ、まだちょっと割り切れない思いがくすぶっていたかもしれない。母や自分にも少しの不満を感じていたのかもしれない。心配したであろう宗内先生の発した一言は、少女をして一瞬に輝かしい表情に変えてしまった。少女は、喜びと誇りを胸一杯味わうことができ、母への愛も利他の精神をも一層深めることになったのではないか。母も宗内先生の言葉に励まされ、わが娘の成長を喜べるひと時にできたのではないか。宗内先生の、相手を思いやる優しさと、適時、適切な判断力・行動力に、宗内先生のいう「人間性」や「指導力」の極意を見せつけられた思いである。

宗内先生の教育論は、教師養成という役割ももつ大学の教授であったことから「教師論」、「生徒指導論」を主軸にされた。その理論は論理的でありながらも、宗内先生の人生経験をも加味された人間的で実践的な理論になっている。それ故、宗内先生の著作は、読んで楽しく説得力にも富んでいる。私自身も愛読者の一人である。勤務校が荒れた時は、宗内先生の著作が指導の道しるべになった。危機を乗り越えるために本当に助けられた思い出がある。宗内先生の教育論の底流にあるものは、「優しさと厳しさ」であろう。親子関係であっても教師生徒関係であっても、共通する宗内理論の要諦となっているものと考えている。

【引用文献・参考文献】

- 宗内敦（1978）『発達臨床心理学』教育科学出版
宗内敦（2006）『十三分の一 怒りつ、念いつ、鎮まりつ』武蔵野書房
宗内敦（2007）『先生、出番です！ 担任教師のふれあい指導』雇用問題研究会
宗内敦（2011）『二言、三言、世迷い言』書肆彩光
宗内敦（2017）『エッセイで読み解く教育・指導のエッセンス』書肆彩光
宗内敦編（1995）『琅』第4号 琅の会
宗内敦編（2009）『琅』第22号 琅の会

（2017年12月31日原稿受理）

The Education Theory of Professor Atsushi Muneuchi

Mitsuo HOSAKA